

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	道家の無有論と盜賊説 : 論説
Author(s)	野々口, 勝太郎
Citation	龍南會雜誌, 98: 9-17
Issue date	1903-03-31
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5469">http://hdl.handle.net/2298/5469</a>
Right	

られたものは先づ無いと謂ふても差支はない。只職を罷められた者は往々あつたらしい。前に云つた關松窓や市川寛齋の如きもの例である。殊に松窓は林家四世の學職を勤めて居たのに其れを廢して、其上離門終身禁錮同様の憐れな境遇に陥つた。松窓の後を襲へる平澤五助旭山も林衡の聖堂本改革につれ異學と稱せられて八代巢岸の學職を罷められた。要するに異學の禁は、非常の極度には達せなかつた。何となれば罪せられた者も少なく、又異學の徒にして時としては登庸せられた者も見ゆるからである。

吾人ハふれより第三章として支那及西洋との比較をなし以て結論に及ぶ筈であつたけれども、元來此篇は數師方の原稿の互しき折々に埋め草として出したのであつて、猶曠日彌久の譏を招く恐れがあるから此邊で擱筆しよう。

## 道家の無有論と盜賊説

講師野々口勝太郎

萬象は屬々として充てり、羣類は蕤々として動けり、下に山岳峙ち、江河流れ、草木茂り、雞犬蟋蟀咽びまた啼き、上に日星輝き、風雨亂れ、霜雪結び、雲霧雷霆飛び且つ轟く、此の中間はありて塊然なるもの、是れ人とわれ、われに接して家人の偃仰するあり、われを離れて行人の抵觸するあり、之を天地の大なるにくらべ見ば、其形寸なる能はずして、豆の如く小なるべしとすらむ、たゞ夫れ目を開くところ萬象こゝに森羅すれども、一たび目を閉づれば黒闇々、一切の萬象は消れてそこに在らず、(機に心よりして眼にうつり、既に見たる印象を數ふるを得むといへども、これぞ、彼道家の無有論を見るべき所なる、

萬象一切の本體は虚なり、無なり、決して有形的に實在するものにあらじ、さらばいかにして生成するか、其の無形なるところに一種玄妙なる力あり、此の力のつからなる游離によりて、萬象を氣化し、やがて有形實體とならしむ、彼の處寂寥たり、其の化恍惚たり、此の氣窈冥たり、得て名づくべからず、已むなくして道と名づくとぞ、畏これれども彼の猶太にはじまれる教の、神なるもの宇宙の外にありて、いづれよりか、泥塑やうのものにても持てきたりけむ、其の意によりて、種種たる宇宙を造り給ひたりとするが如きは、固より道家の取らざる所にして、いはば此の間に一の智識、一の穿鑿をも加ふべからず、一切たゞ自然なり、無のうちに一種の力あるも自然なり、無より有を生ずるも、亦た自然なりとせむこと、是れ道家の根本的思想なるべし、

有形と非有形、即ち實體と非實體とは、甚しく懸隔せる二個の概念なるに、之を何としてか連屬せしめたる、手近かにいはば陰陽といひ、晝夜といひ、剛柔といひ、美惡といひ、大小長短といふ、皆な物の兩端にして矛盾せるものなれども、物その物は同一なれば、極と極とは連屬ありとすべからずや、主觀の認識もし相對の一を可定せば、必ず反對の一を否定せむの豫想を生ずべし、然るも此否定せられむものは、可定のものといかなる關係をもつか、或は關係なきか、既に正反對しべきものならば、其物自身、積消兩極の頭端に於て相對接し得るものとせむ、圓の線に於けるも然り、是れ矛盾を一致せしめて、一個絕對域の思索せらるる所以にして、無有虚實あきらかに反對せるものなれども、左右兩手を叩いて、響き何れよりなるかを知られざる如きものにあらずや、今わが目にみゆる有や、實や、必ず虚なるもの無なるものありて、始めて其反對の響はれたるものなりとせむこと、是れ道家の理論約解釋なるべし、

前段のよりいはず、所謂道は絶對にして、相對の域を超越したるもの、平等無差別なりとすらむ。後段のよりいはず、其と根本思想は、猶ほ且つ相對の現象に基きたるものならむ、

道家の起れる前代に周易あり、乾（即ち道）元（即ち萬物の始）の大を説けり、然るに道といふのみはて解し難きがゆゑに、猶ほ陰陽を借りて、一陰一陽之を道といふと説けり、そは陰陽未だ交はらず、物未だ生らざるものなり、陰陽一たび交りて物を生ずるや、其の氣運りて水となるべし水は無と有との際により、姑め無に離れて有に入れるなり、道家の祖はこをも必ず自家思索の基礎にとりたるならむ、其の言に上善（道に繼いである）は水の若し、又た水は道に幾かしと（老子第八章）あり、これにて矛盾を無理に一致せしめたる根本思想は一層明白となれり、

今この道教を研究するわれも亦た人たり、便宜上人を離れて世界を研究すること能はず、人の心に味はしむる世の辛酸甘苦は、實に人間のあはれ、はかなしとせらるる所以、かくもあはれはかなき人を、何がゆゑに自然力はどのものが生成したるかど、道家の言に従ひて、一わたり人生を觀すれば、自然の力に恨みあり、されどもかかる人間の境遇、これ自然なりと諦觀せむは、所謂至人ならむ、達人ならむ、われとても、此の心、かの自然力の溢れ出づるところに徹するまで瞑想せば、人間の秘論を握れる自然力にして、人に其の尤も厭惡する死の時を告げざるは、是れ死生も一にして、生即ち實、死即ち虚なるものにあらず、一切皆な無、永劫無盡際までも、道の支配の下にあることを暗示したる一證として、之を承認し得べし、さらばたゞ世はつらし、命は惜しと、人生を悲觀するも、又は悲觀の因あればぞ、強ひて自から慰めむとすなる樂天も、實はこゝに許容すべからざるものなるべし、

若し道家をして言はしめば、一個の細胞母の胎内に宿りて、遂には鉅萬の細胞となり、四肢五体を完具して現し世に出で、年經るまゝに細胞は漸く減じ、筋肉衰へ、皮たるみて、幾重の皺を波どうたせ、髪は雪どかはり、腰は弓とまがり、やがて茲にねさらばと暇を告げむ人の世は、是れたゞ目に映する、人の活動の中止にてあるのみか、先づ四圍の身邊に見よ、動くものあり、靜かなるものありて、時間空間の上より、動くものは其の動くところを見るべしといへども、靜かなるものは其の動かざるところを、何處と捕捉すること能はざるにあらすや、動かねばこそ見ぬ、見ぬは即ち虛なる所以、この点よりして、自然の道は虚にまて、すぎゆくわたちの迹も見えず、其の靜の極みは、やがて万物を生成する力こもれるところ、人の之を相し、之を聽き、之を臭ぐこと能はざる所以ともいふべし、されば道家がいへる如く、虚なる萬物の根元は、即ち靜なるを知れ、人の動滅ゆるときは、復た靜に歸へることをも知れ、

既に自然なるがゆゑに、一切の萬物はたのれ自から生滅すべからずとすらむ、既に一定の運命あるがゆゑに、人類の意思もたのれ自から左右すべからずとすらむ、是に於てか、たのが身体をも客觀視せざるべからずなりぬ、

請ふ先づ老子の言ふ所を聽け、吾れに大患ある所以は、吾れ身を有すとすればなり、吾れ身を有せずとするに及んで、吾れ何の患かあらむと、(第十三章)

第二に列子の語る所を聽け、舜無有を恣に問ふ、恣曰く汝が身すら汝の有にはあらじ、舜曰くさらば吾が身は孰れ之を有するぞ、曰く是れ天地の委形なり、生も汝が有にはあらじ、是れ天地の委和なり、性命も汝が有にはあらじ、是れ天地の愍順なり、(若し汝が有とせば、美惡死生たのが意思に

て之を制し得む、子孫も汝が有にはあらじ、是れ天地の委蛻なり、（汝が有とせば、男女多少汝が思ふ通りならむ、）さて天地は、結ばれたるものゝ最も大なるものなり、強き陽氣なり、汝が行くも、處るも、食ふも、息むも、皆な此の氣の運動する所なりと、（天瑞篇）

第三に莊子の話す所を聽け、惠子は莊子に問へり、人もどより情なきかと、莊子曰く然り、曰く人にして情なければ何を以て之を人といはむや、曰く道これに貌を與へ、天これに形を與ふ、惡んぞ情なきことを得む、曰く既に之を人といふ、惡んぞ情なきことを得む、曰く是れ吾が所謂情にはあらじ、吾が所謂情なしとは、人の好惡もて内に其の身を傷けず、また常に自然に因るのみにて、人為をこれに參へて、其の生を裨益せざるをいふなりと、（徳充符篇）

最後に楊子の説く所を聽け、身は我が有に非ず、生を全うすとも其の身を有すべからじ、物は我が有にあらず、物をすてすとも其の物を有すべからじ、物を有し身を有せむは、是れ天下の身を私し、天下の物を私するものにして、ろは唯だ聖人なるか、天下の身を公にし、天下の物を公にするは、それだ至人なりと、（列子楊朱篇）

こゝに如上の説を概括していはば、第一自然に無より有を生ずとは、最も進歩したる近世の科學者が、物と力とは一なりと説く所に接觸せずや、第二有機体無機体を通じて自から生滅し得ずとし、到頭此の肉体をも客觀的にしたるは、又た西哲が説く所の無意識論に彷彿たらむや、實にこは天然に流るる根本の大理法が、万物一切をして、知らず識らず其の存在を遂げしむとするものにして、殆んど人間の思想に超越したる、抽象的概念を得たるものといふべし、しかはあれども、此の肉体を主觀的と視さるところの如き、直ちに一疑問を挟む餘地あり、即ち人は意識ある自覺性を有する

こと、争ふべからざる經驗にして、道家の觀するが如く、人の知覺運動とも、自然力に驅りてせしめらるゝやうなるは、是れ人が自然と同化し、冥合するものといふべければなり、諸子すでは精骨、さらに多く言うて、これを解決せむ要やある、いでや此れより無有論の餘波なる盜賊説を検せむ、われに掲げられたる盜賊説とは、自然を以てたのが有とするものを盜賊とする事なり、自然を傷害して、人爲を參加するを盜賊とする事なり、老子のは、一喝直ちに所謂聖人を痛詆せり、曰く大道廢たれて仁義あり、智慧出でゝ大偽あり、六親和せずして孝慈あり、國家昏亂して忠信あり、(第十八章)聖を絶ち智を棄つれば、民利百倍し、仁を絶ち義を棄れば、民は孝慈に復し、巧を絶ち利を棄つれば、盜賊は有ることなし、(第十九章)大姦(自然に對する)たれば小盜隨ひ、大姦唱ふれば小盜和すと、(韓非子解老篇)

莊子のは、老子が絶聖棄智の説を取りて、一層大膽不敵なるものあり、詮ずる所、大盜賊これ聖人の化身なりとせり、曰く聖人生れて大盜起れり、聖人を掊撃し盜賊を縱舍して、天下始めて治まらむ、聖人已に死すれば則ち大盜起らず、天下平にして故なからむ、聖人死せずんば大盜止まず、聖人に重ねて天下を治めしむと、是れ重ねて盜跖を利するあらむのみと、(肚饒篇)

楊子のは、其孟孫陽との自殺問答にて、自殺また一の大なる盜賊なりとの意を明かにせり、曰く孟孫陽は楊子には一種の厭世觀あるを知りて自殺の却て可ならむを問へり、若し速亡の久生に愈れるありとせば、鋒刃を踐み、湯火に入り、志す所を得むは、いかにと、楊子これに答へて否々、既に生るれば、すてて其欲する所を究めしめ、以て死を俟たむ、將に死せむときは、廢てゝ其の之く所を究めしめ、以て盡くるに任せむ、何ぞ遽に其の間に遲速あらしめむやと、(楊朱篇)

列子<sup>の</sup>は、前<sup>の</sup>諸子と大に其の撰を異にせり、盜賊説としては、一段の進境あるを覺ゆ、其の書中に一説話あり、曰く齊の國大ひに富み。宋の向氏大に貧し、宋よりゆきて其の術を問ふに國氏これに、盜を告げたり、向氏喜びかへりて、遂に垣を踰ぬ、室を鑿ち、手目の及ぶところ、探らざるなく、やがて賊を以て罪を獲、その財寶を官沒せられぬ、向氏ゆきて之れを怨む、國氏曰く、あゝ汝、盜をなすの道を失ふこと此に至るか、今吾れ汝に告げむ、吾れ聞く天に時あり、地に利あり、吾れ天地の時利、雲雨の滂潤、山澤の產育を盜みて、以つて吾が禾を生じ、吾が稼を殖し、吾が垣を築き、吾が舍を建つ、陸には禽獸を盜み、水には魚鼈を盜む、盜にあらざるはなし、彼の禾稼土木禽獸魚鼈、皆な天の生ずる所、豈に吾が有する所ならむや、されども吾れ天を盜んで殃なし、彼の金玉珍寶穀帛財貨は、人の聚る所、豈に天の與ふる所ならむや、汝之を盜んで罪を獲、また孰れをか怨むと、向氏大に惑ひ、東郭先生につきて之を問ふ、先生曰く、汝一身も亦た盜にあらすや、陰陽の和を盜んで、以て汝が生を成し、汝が形を載するなり、されば天地萬物一体にして、相離れざるものなるに、認めて之を有せむは、皆な惑ひなり、國氏は公道を盜むがゆゑに殃なし、汝は私心を盜むがゆゑに罪を得、公私を有するものも亦た盜なり、公私を亡ふものも亦た盜なり、惟だ天地の徳を知るもの、孰れをか、盜とせむ、孰れをか不盜とせむと、(天瑞篇)天地ただ自然のみにて、此の境公私あらず、盜と不盜と、理に於て差なきをいへるなり、此れ等の盜賊説も、亦た其の端を周易に發すといふべからずや、坤の上六に、龍、野に戰ふ、其の血玄黃なりといふが如きは、自然物と自然物とに衝突を形容せるものにして、陰(小)陽(大)相爭ふは、盜必ず陽に従ふべきに、鉤敵して小大の差なからむまで、否、盜を凌がむまで、盜之の盛を



極めて來るときにあり、此の場合、盜の傷づくは論なく、龍（即ち陽）これと戦ふ、また傷づくことなき能はず天（玄）地（黄）皆な傷づくべしと、即ち自然人が自然力を盜賊せむは、又た此の如くなるべきに豫想するものなり、

なほいふべきは、莊列韓非淮南等の書中にあらはれたる、堯舜時代の人々なり、多くは堯より、舜より、一國禪讓の相談をうけたるに、囂々然として之を辭したるものなり、眞に其の人ありて、諸子の仮託にあらずば、そを諸子が自然主義の根源とし、又た彼れ等が天下を辭したるは、實に對自然盜賊の嫌を避けたるものと、諸子は見倣したるならむ、被衣や、鬻歆や、巢父や、許由や、善卷や、子州支父や、石戸之農や、蒲衣子や皆な是れ、將た堯も舜も甯然として天下を喪ひたるところ、無我自然の證なりとせざるべからず是れも諸子に領會せられけむか、

兎に角に、今より二千四百有餘年の前なる支那に於ては、早く既に此の如き形而上學を形作りたるなり、その祖はもとより老子にして、列莊二子を宗とし、楊子を支派とす、而して諸子が思想の基くところは、既に言ひたる所の如くなれども、其の時勢の影響を受けたることは、決して決して閑却すべからざるものあり、諸子は前代の簡易質朴なるが、時運の推移につれ、四圓の爭亂になれて、將に腐敗混亂せむとし、又は既に大に、腐敗混亂したる社會に立ち、各々特殊なる境遇に在りて、現社會反對の鐘鼓を撃ちたるものにあらずや、或るものは、一世を冷却せむ泡沫を口角に吹き、或るものは、時俗の稱する聖人の、骨も透れど刺さむ舌鋒を殺手に磨き、或るものは、一切の反對者を罵りて、丹の唇爛れ、朱の眦さけむとするも、所詮は其の胸中必ず人生に對する一團の心血、熱上し熱下して、七尺の身に迷らむものありしならむ、

中於就の自傳客觀説の如き、打ち見たとて甚だ高尚なれども、是れ時弊に警策を與へたるもの、盜賊説の如き、また尤も怪僻なれども、是れたゞ自然なれといふを、矯語も飾れるなりと知れば、其の他常理にて較量すべからざる立言ありとも、之を讀むものは、文字なき處に於て其の意を體すべし、若し好事の者ありて、諸子を黃土より起し、學術技巧進歩して、自然を驅使し威壓し、猾智陰謀發達して、罪惡に鞭逼し耽溺する大盜小盜が、後の世界に張梁するを一瞥せしめ得ば、いかに、いかに憤々懣々せむか、是はわが關する所にあらざるなり、但だ道教には奇語險語多ければ、之を其の儘に取らむは、弊ありて利なからむを言うてやむべし、然るに、彼の儒家の祖が、不可の際に常理を案じ、中庸一遍に執着して、性と天道とは得て聞かばからじと、易の所謂形而下の器をのみ、人に示しなるは、固より後世を慮かること深きものありて、今より欽仰すべしとせむも、此の道家の祖が、直ちに萬物の源頭に溯りて、所謂形而上の道を明かにし、乃ち是れ現未來の一切を律するものとぞ、人心を警醒するに急ぎたる、また味ふに堪ふべからむ、況んや、諸子のうちにも政治論社會説の如き、別に昭々として尋ねべきものあるをや、斯くて諸子の思潮は、遂に戸俊慎到韓非淮南等に流れて、その秦漢の際より歷世に通じたり、且つこれが思想の影響は、遠く本邦古來の或る學派に亘れり、われは此の稿に於て、古今東西の人が、いかに道家の言に取りて、自然主義を鼓吹したるかを、究めむ餘裕なきを遺憾とす、

